



ねこから目線。インパクトレポートを公開！

猫問題を解決するための社会的企業として、「ねこから目線。」を立ち上げて、6回目の決算を終えました。一般的な株式会社の場合は、「利益がどれほど出たのか」が実績として発表され、企業評価をされます。一方で、ねこから目線。のように、社会課題の解決をメインの目的とした社会的企業の場合は、ではなく、「どれくらいの影響を社会に与える事ができたのか」、という実績を発表することで、企業価値を評価してもらいます。その発表方法の一つが、「インパクトレポート」です。

これまで、1年間のまとめ報告を簡単にHPのブログで実施することで胡麻化してきましたが、今回、はじめてインパクトレポート作成に挑戦しました。決算報告書と違って、テンプレートがあるわけではないので、色んな会社が出しているインパクトレポートを読んで、構成や見せ方を練っていきました。今回のマガジンでは、インパクトレポート作成の裏話と、レポートに載せられなかった心の声を書き綴っていきたいと思います！

表紙：読み物か、見せ物か



まずはインパクトレポートの方向性を決めなければいけません。それに伴って決まってくるのがサイズ感です。伝えたい事を沢山伝える為に、しっかり読み込んでもらう為の物であればA4縦が見やすいでしょう。しかし、文字数が多くなればなるほど、興味関心を持って最後まで読んでくれる

人は限られてきます。少ない人数でも深く理解してくれる応援者を作っていくのか、浅くとも多くの理解者を作っていくべきか。どちらが会社にとって、ひいては猫にとってメ

リットがあるのか、めちゃくちゃ悩みましたが、インパクトレポートを作る目的としては、より多くの人に、活動を知ってほしい、興味を持ってほしい。という思いが強いので、言いたい事、伝えたい事を極限まで減らす必要はありますが、A4横サイズで写真メインの見せ物スタイルでいくことに決めました！

今回は、スケジュールと予算の関係から、デザイナーさんを入れることは諦め、素人でもそれなりに良いデザインを作れるアプリのCanvaを使用して作成しました。Canvaを選んだ1番の理由は、「オシャレに見せたい」でしたが、実際に公開してみて、さらに良いなと思ったポイントがあるので、こちらも共有します。1つは、Canva上で、「公開閲覧リンク」を作成できることです。そのリンクを送れば、添付ファイルなどしなくてもWeb上で常に最新版を見てもらう事ができます。さらに2つ目の良かったポイントとしては、修正箇所があとから出てきてしまっても、しれっと修正すれば以降インパクトレポートを見る人すべてに修正版を見ていただけるという加筆修正の楽さが後から直したいポイントが出て来がちな私には合っていました。

もくじ：構成



構成内容（何を載せるか、どういう順番で載せるか）も最後まで悩みに悩みましたが、ねこから目線。を知らないどころか、猫問題すら知らないレベルの方に見てもらっても伝わるように、構成を練りました。

ねこから目線。の自己紹介から



自社のPRですから、まずは「ねこから目線。」について概要説明を入れました。ちなみに、初めは見出しをカッコよく「ABOUT US」にしていたんですが、中途半端な英語は分かりにくいし、むしろダサい。と言われ、「ねこから目線。とは」に落ち着きました。

その他の取組み 今後の布石に

そして、最後に今期の取組で力を入れたポイント、今後の事業の変革のきっかけになりよそうなケースなどを紹介しました。例えば、多くのメディアに取り上げられ、社会的インパクトがそれなりにあったと考えられる動物虐待犯の逮捕につながったケース。



次に、大規模商業施設のノラ猫管理業務、これは今までのねこから目線。では基本にご依頼は現場で猫さんにご飯をあげてくださっている方から直接いただくことがほとんどでした。これを一般的にはBtoC（企業が一般消費者に向けたサービス）と言いますが、今回の大規模商業施設のノラ猫さん管理は初めてのBtoB（企業が企業に向けたサービス）でした。今後は、現場の個人の方からの単発依頼対応だけでなく、大きな敷地を持つ企業や神社やお寺、行政と業務委託契約を結んでいけるような事業形態も模索していきたいと思っています。そのため、今後の布石になりえるケースとして紹介しました。



そして、最後にメディア掲載リストを報告して終了です。全19ページになりました。

インパクトレポートを作ってみて

私が活動を始めた20年前は、猫の殺処分数は年間20万頭にもものぼりました。年を経る毎に殺処分数はぐんぐん減り、環境省が発表した令和4年度の殺処分数は9,472匹にまで減少しました。スローガンとしての「殺処分ゼロ」は広く浸透し、達成できるという空気感も感じます。しかし、この数字はあくまで行政機関において殺処分された猫の頭数でしかなく、人と動物の共生センターが発表した令和6年度のロードキル数（交通事故等で亡くなった猫の遺体回収頭数）は、殺処分数のおよそ24倍になると調査報告を発表し、世間に衝撃を与えました。それ以外にも、少し古い統計になりますが、ペットショップの流通過程で死亡している犬猫が年間2万6千匹（2018年朝日新聞調べ）という調査報告もあります。ねこから目線。としては、当然ですが、行政機関における「殺処分ゼロ」が達成できれば良いと思っているわけではありません。

最終的に目指したい世界としては、

「すべての猫が惜しまれて死んでいける社会」

を目指したい。と強く思っています。この言葉は、ねこから目線。のスタッフと殺処分ゼロは短期的な目標であって、本質ではないという話をしている中で、「じゃあ小池さんは最終的に猫さんがどんな状態になったらいいと思ってるんですか？」と問われて、反射的に出た言葉でした。

「ノラ猫はゼロになるべきなのか、トラブルにならなければ存在は認められるのか」猫さんの在り方、関わり方には同じように動物愛護活動をしている人でも考えは様々です。その猫さんが住んでいる環境もバラバラなので、完全に1つに統一する事は難しいでしょう。それでも、どんなありかたであろうと、人知れず車に轢かれたり、餓死したり、名無しのまま保健所で殺処分されたりするのではなく、全ての猫さんがかけがえのない存在として、惜しまれながら死んで行ってほしい。そう心の底から願っています。でも、願うだけでは社会は変わらないので、日々、悩みながらもがむしゃらに活動し続けていきたいと思っています。

社会企業の四苦八苦 インパクトレポート全文はこちら▶



おわり



小池英梨子

ねこから目線。～保護猫とノラ猫専門のお手伝い屋さん～ 代表

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com